

近代化政策下における中国農村社会の「差序格局」

花澤 聖子

1、はじめに

中国で著名な社会学者であり人類学者でもある費孝通は、1947年に表した著作『郷土中国』⁽¹⁾の中で、中華人民共和国建国前に自らが行った農村調査を集大成し、理念型としての「郷土社会」を提示した。

費は、中国の都市が、アヘン戦争のインパクト以来、中国の伝統的農村社会とは異なる特性を持つてはいるものの、その基層に「郷土性」があると考え、その基層を捉えるには伝統的農村社会のコミュニティーつまり、村落を分析する必要があると考えた。村落研究の結果、費は、中国の伝統的農村の社会構造の最も基本的特性を、「差序格局」という四文字で表現した。

今日の農村は、伝統的農村と異なり、多くの農民が郷鎮企業に勤め、余剰労働力は「農民工」（出稼ぎ農民）として都市に出て働くなど、農業以外の産業にも従事している。伝統的農村社会とは、人口の流動性も産業構造も異なり、人々の生活環境は大きく変化している。そうした変化に伴い、伝統社会の基層構造である「差序格局」も変化したのだろうか。もし変化しているとしたらどのように変化したのであろうか。改革・開放後、中国の多くの研究者がこのテーマに取り組んでいる。筆者の調べたところでは、「差序格局」をテーマとする論文は日本では見あたらないのだが、この概念は、今日、「クアンシ」^{クアンシ}社会と言われる中国社会の「関係」研究の基点となっている重要な概念でもあるのだ。

本稿では、まず、費が理念型として提示した「郷土社会」と「差序格局」の基本概念を捉え、次に近代化政策下で農村に生じた3つの大きな変化、す

なわち、農家経営請負制と、郷鎮企業の発展、出稼ぎ現象との係りにおいて、中国の研究者が、「差序格局」についてどのように論じているのかを巨視的に把握し、最後に筆者の見解を述べることとする。

2、「差序格局」を育んだ「郷土社会」

「差序格局」は「郷土社会」、すなわち、伝統的農村社会で生まれたのだが、それは、どのような特色を持った社会だったのだろうか。『郷土中国』で描かれている伝統的な中国農村社会の特色をまとめることとする。

「郷土社会」は、農業による自給自足社会で、土地は農民にとって命綱である。彼らは土に根を生やすように代々その土地に住み農業を営み、大多数の農民は集村をなして住んでいる。費は、中国の農業は耕作活動における分業の程度が浅かったため、農業そのもののためにはみんなが一緒に住む必要はなかったとして、農民が集村で住む理由を以下のようにまとめている。

第1に小農経営のために一ヶ所に集まって住んでも住宅と農地が離れすぎることがない。第2に水利を必要とする地方では協力し合う必要があり、共同作業がしやすい。第3に人が多い方が防衛に有利で安全である。第4に兄弟が、祖先の遺産として土地を平等に分割して相続するため、それが一つの地方に代々積み重なり、相対的に大きな村落を形成するに至る。こうした社会では、地縁は血縁の投影に過ぎず、血縁と地縁の合一が村落の原始状態である。「郷土社会」では、血縁は父系の親族原理が原則となっている。

「郷土社会」は、そこで生まれ、そこで育ち、そこで死ぬ社会だ。代々住み続け、人口が飽和点に達すると、別のところに新しい土地を切り開くことにはなる⁽²⁾が、極めて流動性の低い社会だ。自給自足する「郷土社会」における人口は流動する必要がないからである。その結果、周囲の人はみな幼いころからの「顔見知り」となる。継続的に接触する中で慣れ親しむことによって、親密な感覚が醸成される。人々は熟知した場所で、親しんだ人の間で安

心を得て成長する。

「郷土社会」の互いに熟知した人間同士では、「おれたちはみんな顔見知りだ、声をかければそれでいい、多くを語る必要は何もない」(3)という間柄であり、見知らぬ人が構成する現代社会のように、法律や契約に根拠を求めたりすれば、「随分水臭い」ということになる。「郷土社会の信用とは、契約を重視するものではなく、ある行動のきまりについて考える必要がない程、熟知していることから生じた確かさをもったものなのである。」(4)信用は親密な関係の中にある。熟知した環境の中で生き、熟知から生まれる認識は個別のものであり、決して抽象的な普遍的な原則ではない。人に対しても、また環境に対しても熟知しているからこそ、法のような普遍的な規則は必要なく、個別的な対応が可能となるのである。「郷土社会」において、法律は発生するところがない。行動原則は、熟知しているが故に個別的なのだ。

中国の農村には、「客^{カーピエン}辺」、「新^{シンカー}客」、「外^{ワイツンレン}村人」と呼ばれる人々がいる。彼らは数世代にわたっても「新客」と呼ばれ、仲間とされず、信用もされない。このことは地縁は血縁を離れて意味を持っていないという証明になる。中国の村落は人口の流動性が極めて低く、閉鎖的で排他性をもっている。村人にとっては、居住時間は重要な条件ではなく、これらの人々は数世代にもわたって村人から「新客」と呼ばれ、本当の村人にはしてもらえない。本当の村人になるには、村に自らの土地をまず手に入れ、婚姻を通して地元の親族圏に入る必要があるが、実際には土地を手に入れるには宗族の許可が必要であり、容易なことではない。

中国農村コミュニティーの単位は村落であるが、村落間の関係は絶対的な孤立と断絶とまでは言えないまでも疎遠であり、接触が少ない。彼らは活動する範囲として他から孤立したテリトリー＝「^{チュアンツ}圈子」を持っている。

「郷土社会」は現代社会と比較したときに、静止と言えるほど変化に乏しい社会で、一代一代人々の生活に役立つ方法が累積され、それが次の世代へ

と伝えられてきた。その結果として、長幼の間に社会的差異が生まれ、年長者が権力を持つことになる。行政権力のコントロールが相対的に希薄で、同族の長老政治が行われた。「礼」に合致しているかどうか、正しく行為が行われているかどうかという基準になる。「礼」は伝統であり、「社会に公認された適正な行為規範」(5)であり、各人の習慣によって維持される。従って、「礼治社会は変化の速やかな時代に出現することはありえない。」(6)「礼」には「文明的」、「慈悲深い」、あるいは「人にあえば頭をさげる」、極悪非道でないといった意味は含まれていない。「礼」であっても人を殺すことができ、頗る「野蛮」たりうるのである。(7) 費は、法治社会ではなく、礼治社会が「郷土社会」の一つの特徴であると述べている。人々はトラブルが起きても裁判所に訴えることをせず、郷紳など、村の顔役に仲裁を頼む。彼らは両者を前に意見を述べ、両者を裁くのではなく、両者を教育する。これに従って両者はいつも和解することになり、騒ぎを起こした罰として仲裁者を一度食事に招く。これが一つのパターンになっている。裁判を起こす人は調停の結果に不満を持つ人、つまり、「礼」に服さない人非人とされた人々である。裁判では、郷村社会で悪い行為とされたものが合法的な行為となったりするので、村人には司法は悪をかばう組織に見え、彼らは訴訟することを恐れた。

まとめるならば、伝統的社会は、農業による自給自足社会で、流動性のない閉鎖的で排他的な変化に乏しい、従って人間関係も固定的な社会である。それ故に、普遍的に適用する法や規則ではなく、互いに熟知した仲での個別対応が可能で、人々は「礼」に従って生活している。父系の血縁を紐帯に、「圈子」の中で安心と信頼を持って生活していた。

3、 伝統社会の「差序格局」

費は「郷土社会」の村落を实地調査し、その社会構造は、無数の私人関係が組み合わさったネットワークから成り立っており(8)、一つ一つのネット

近代化政策下における中国農村社会の「差序格局」

ワークは、異なる「己」を中心として同心円状に広がっているという結論を得た。それは「一塊の石を水面に投げたときに一輪ずつ押し広がって生じる波紋のようなもの」(9)であり、その基本的特性、すなわち中国の社会構造を特徴づけている結合の原則を「あたかも水の波紋のようであり、一輪ずつ押し広がると、遠くへと広がれば広がるほど薄くなっていくようなものである」(10)という比喩で表した。そして、この基層構造を「差序格局」(序列と格差のモデル) (11)と呼んだ。

この比喩と「己」を中心として同心円状に広がる私人関係のネットワークを重ね合わせて考えるとき、「差序」とは、「己」が心の中で他者を異なる半径の同心円状に序列化して位置づけ、ウチからソトに向けて波紋の高さが徐々に低くなっていくように、「序(序列)」に従って「差(格差)」が生じるということであり、「…一切の普遍的規準が全く働かず、必ず対象が誰か、自己とどんな関係かをはっきりさせた後で、初めていかなる規準を取り出すか決める」(12)ということになる。

この「差序格局」の中心となる「己」は、「己」と家族の境界も曖昧で、母方、妻方の親族に対し父系の親族は「己」であるというように、伸縮自在性を持った「己」である。費は「己」は西洋のような個人主義ではなく、「全ての価値は己を中心とする主義」すなわち「自我主義」であると規定し、中国人は「自己のために家を犠牲にでき、家のために党を犠牲にでき、党のために国を犠牲にでき、国のために天下を犠牲にできる」(13)と述べている。それ故に、「差序格局」の中の道德体系の出発点は、「己を克めて礼に復る」(『論語』顔淵)が最も基本で重要だとする。そして、仁、五倫といった儒家の倫理が、中心となる「己」と同心円状の点を結ぶ連線、すなわち「関係」を維持する重要な要素となっているのだ。「差序格局」の中には私人関係を越える道德観念は1つもない。(14)

ト長利は「己」は中国の社会構造を考える上で最小の単位だが、実態とし

ては「己の人格は非独立的なものだ」と、費の「己」を中心とするという考え方に反論を加えている。すなわち、儒教文化で強調される修身は「忘我」であり、儒教倫理体系の下で、「己」はその関係の中で意義を持つ一種の関係体であり、人は家に属する存在であるから、「己をもって中心とする」より「家族あるいは同族をもって中心とする」であると主張している。⁽¹⁵⁾トはこうした「己」を、「家我」と呼んでいる。費のいうところの「己」は自己利益を第一とする本質的原則的「己」であり、トは儒家の論理によって教化され社会化された「己」を捉えていると解釈できるだろう。

「差序格局」の中では、「公」と「私」も相対的なものである。⁽¹⁶⁾ 家族のために同族を犠牲にするとき、「己」にとって家族は「公」であり、同族のために党を犠牲にするとき、「己」にとって同族は「公」であると考ええる。

伝統社会の「差序格局」に含まれる主な社会関係は、父系の血縁関係と地縁関係である。父子、夫婦、兄弟姉妹といった家族が、最も内側の同心円状に位置づけられ、「己」との血縁上の遠近によって同心円状に外に向かって父系の親族が位置づけられる。地縁関係を考える場合、中心となるのは「家」であり、「場所の遠近がある種の血縁的親疎を反映している」⁽¹⁷⁾ とあるように、場所的に近い方が、原則として中心に近い同心円状に位置づけられる。半径の長さは血縁の遠近と親疎によって規定される。すなわち、変化の少ない社会において親疎の情感が基本的に血縁の遠近と正比例しているということが読み取れる。

「己」を中心とする私人関係の及ぶ範囲、すなわち「圈子」を拡大するルートは血縁の他に友人がある。友人は儒家の「男女の別」に基づき、同性の原則を持ったものであり、家族においても主軸は父子、姑嫁の間という同性の縦軸にあり、夫婦は従軸となっている。親しい友人はと義兄弟関係などを結び、親族として遇する。

「己」の社会範囲は私人関係が構成するネットワーク、すなわち「圈子」

の内側にあり、この「圈子」は、中心となる「己」の財力や名声の有無など、その権勢の相違によって伸縮する。また、同じ人物や家であっても、それらを失えば、「圈子」は縮まってしまう。

「差序格局」は儒家の倫理モデルを体現したものであり、儒家の倫理といった道徳的要素は、五倫などそれぞれの社会関係を結ぶ連線を維持する働きをしていると同時に、個体間の地位と役割を定め、社会構造の秩序を形作る基本原則となっている。そして、「男女の別」でもわかるように、中心となる「己」の半径の長短、すなわち距離の決定にかかわる要素としても作用する。従って、血縁の遠近、親疎、倫理の要素が同心円の半径の長さを決定する要素となっていることがわかる。

人々にとって、「差序格局」の「圈子」の中の間人間関係は固定的であり、儒教倫理に従って、「礼」をもって行動し、相互に助け合って生活することを旨とした。相互扶助は長期的、かつ多面的なため、授受に関して一つ一つ清算することができない。ギブ・アンド・テイクのアンバランスが常態であり、清算は絶交を意味した。⁽¹⁸⁾ それは貸し借りがなければ、互いに付き合う必要もなくなってしまおうと考えるからである。

4、同族関係の強化と「差序格局」内の社会関係の拡大

1949年に中華人民共和国が成立して以来、計画経済の下に、農業が集団化され、農村に人民公社ができ、都市に「単位」が作られたことに加えて、同族観念が度重なる政治思想闘争の対象となったため、伝統的宗族、同族関係はほとんど力を消失したものと思われていた。⁽¹⁹⁾ しかし、改革・開放後、まず農村で起こった顕著な動きは同族関係の強化だった。

第11期3中全会で、農家経営請負制の導入が決定され、1982年には人民公社が解体された。農家経営請負制になり生産隊が解体されたとき、各農家が生産上直面した問題は、役畜と農具の不足だった。こうした事態に対処す

るために、農村でまず生じたのが、父系親族間での農業生産における互助協力の高まりだった。

王思斌は1984年、河北省で調査を行い、人々が生産活動の中でとりわけ同族との協力を重視している実態を報告した。⁽²⁰⁾ 調査によると、農民が生産活動の中で選んだ協力相手は、22.4%が男系三代の親族であり、19.4%が男系三代外五服内の親族で、隣近所を選んだ人は、22.0%、女方の実家を選んだ人は11.7%だった。また、80年代末に行われた江蘇省、浙江省など12の省区の15の村落での実地調査でも同族関係強化の現象が見られたと報告されている。⁽²¹⁾

農業の生産活動面に現れた血縁親族の協力体制は、「離土不離郷」（農業を離れても郷里を離れない）の政策の下で、社隊企業が郷鎮企業へと改遍され発展する過程でも同様に現れ、企業同族化現象が起きた。郷鎮企業は、郷・鎮政府が経営する集団企業と作業員が7人以上の私営企業と、従業員が6人以下の個人企業からなっている。集団企業をめぐって起きた現象は、村の幹部が自らの権力を利用し、自らの一族に長期にわたって企業の請負をやらせることによって、その集団企業の特徴が薄れてしまい、それに乗じて多くの集団の財産がその一族へと流れるという現象だ。このことにより集団経済は空洞化した。その一族はこうして得た資本を後の同族企業の設立と発展に役立てた。⁽²²⁾

同族企業の創設が80年代中期以降普遍的に現れた。一族のメンバーがもたらした企業創設に必要な情報は、確かで信頼でき機に適ったものであり、同族内で資金を集め、熟知した人々がその技術、労力を合理的に活かし合い、コストを低め、小規模にして高効率を実現した。同族による郷鎮企業の発展は、「差序格局」の「圈子」の中の信頼関係に支えられ、「長幼の序」、「忠誠信義」、「知恩必報」といった道德規範が企業内部の行為規範となって、郷鎮企業の凝集力や向上心を高めた。また、同族関係者の推薦、紹介、保証

があれば、必要な資源や商品販売ルートも確保し易く、売上げ資金も確実に回収できるなど、郷鎮企業にとって有利な条件となった。特に村の主力の姓や大きい姓の一族のメンバーが経営する企業は、創業も発展時も比較的順調であり得た。一族に基層幹部がいれば、国からの貸付も容易に受けられるといった有利な条件も得られた。1990年代の郷鎮企業の盛んな発展は、同族の積極的作用があって可能だったと言えるのである。

同族関係は信頼できる上に互いの特徴や長所を心得た関係であり、低資本で高効率をもたらす。それ故に、条件が許す限りその力を発揮した。企業が労働集約型で高い技術水準に達していない状態において、「圈子」の中で人材を見出すことは可能だった。もし、跡を継ぐものがない場合は、彼らは必要に応じて「婿をとる」など、血縁を重視してきた同族の核心に触れる問題でも、経営のために柔軟な適応力を発揮した。⁽²³⁾

農村での生活が市場経済化と近代化の波に飲まれ、これまでになく多くの資源を必要としたとき、人々にとって手近な範囲でそうした資源の提供が可能だったのが同族関係だったと言えるだろう。

自己を中心に外に向かって三代が近親とされ、中心となるものの属する一族の勢力の強弱、経済力の大小によって同族の協力関係は異なっている。多姓の雑居村などでは、地縁や行政関係が房や族に取って代わる可能性があり、村人が地縁や行政関係にどの程度強いアイデンティティーを感じているかにより異なった現象が生れた。⁽²⁴⁾ 同族関係の強化ばかりでなく弱化の報告もあり、同族関係の様相は異なる地区で異なる形で現れ、また各地、時の変化に従って異なる状況が生まれたとは言え、同族関係の強さと働きは依然として顕在であると言えよう。

工業化が始まった村では、村の経済活動が更に活発になると、資源の調達や人的関係など村の外との係り合いも増してくる。そうした中で、人々が取った手段は、同族外の人や村の外の人といった非血縁者と必要に応じて擬

制的血縁関係を結び、自らの「圈子」に引き入れるということだった。こうして業縁関係者と盛んに擬制的血縁関係が結ばれた。「6、郷鎮企業組織と『差序格局』」で見ると、同様の現象が郷鎮企業内でも起こった。また、村の幹部や村の有力者の中から、自分の子供の義父や義母となってくれる人を探し、義理の関係を結ぶのが流行ったという報告もある。⁽²⁵⁾

農村の近代化に伴い、業縁のみならず「^{フインクアンシ}婚姻関係」も「差序格局」に参入し、「差序格局」に含まれる社会関係を拡大した。「婚姻関係」とは、ここでは母方、妻方の親族関係を示す。生産に従事する中で、信頼と協力の有効性は重要なものであり、人々にとって男系の血縁関係に次いで「婚姻関係」がその需要を満たし得るものだった。男三代の同族内での関係に矛盾が起きると、次の協力相手を「婚姻関係」に求める人々の割合が増加した。⁽²⁶⁾そして、経済領域における「婚姻関係」と擬制的血縁関係の活躍の程度は、男系親族に劣らず、中には、「婚姻関係」が男系親族の地位を脅かす場合もあるという指摘もある。⁽²⁷⁾ 親密な友人や権勢がある人と義理の血縁関係を結ぶことは解放前の社会にもあったが、母方、妻方の親族との広範な協力関係は新たに発生した現象であり、注目に値する。

妻方や母方の親族との広範な協力は、父系の単系親族による「差序格局」に大きな変化をもたらしたと言える。かつては男系の血縁関係だけを包容していた同心円の内に女方の親族が入り込むことを意味しており、かつ配偶者との血縁の遠近に基づいて関係の遠近を分けることを意味する。

農村の近代化が進められ同族関係が強化される一方で、必要に応じて「郷土社会」の「差序格局」に擬制的血縁関係のみならず、「婚姻関係」も取り込まれるようになり、「差序格局」に含まれる社会関係の範囲が拡大した。これは「差序格局」研究者の共通した認識である。

5、利益と「差序格局」

元来、「差序格局」は父系の血縁の遠近によって同心円状に固定的に位置づけられ、この遠近は親疎の前提となっていたのだが、改革・開放後、農村の経済が活発化し工業化する過程で、経済的利益が家族や同族の紐帯に影響を与えることになり、親疎を決定する要素として加わったと多くの研究者が考えている。⁽²⁸⁾ 農民の目標は「富むこと」にあり、経済的利益が同族関係の重要な紐帯になったというのである。ト長莉は「利益性の差序格局は現代中国で一定の普遍性を持っている」と述べている。⁽²⁹⁾

「同族、家族がともに歩むのは、情を通わせるためではなく、主に生産のより有効な協力のためであり、経済上の互いの利益のためである。…経済上の利益が同族関係を更に緊密にし、経済的利益の矛盾が家族や同族関係を疎遠にし得るのだ。」⁽³⁰⁾

それ故に、「差序格局」の人間関係は新たに認識されなければならず、血縁上の遠近は関係の親疎の前提条件だが、もはや絶対的なものではなく、双方の利益が合致せず、お互いの満足を満たせない場合は淡化し、ひどくは疎遠になり得るものに変化した。伝統的農業社会で、固定的だった「差序格局」に内包される人間関係は、利益が関係の親疎に影響を及ぼすことによって「差序格局」内の地位に流動性を加えることになった。

擬制的血縁関係を結ぶ方式は、農民にとって同族関係こそが長期的に安定した関係であり、信頼できる関係であるため、いわば「信頼の保証」の働きをもつ。それが元来契約によるべき業縁関係を擬制的血縁関係に転換する意味であり、親しいという情感のみではなく、やはり利益がかかわる関係なのである。

そして、従来含まれなかった「婚姻関係」が「差序格局」に入り込むということは、資源獲得上、双方にとって利益・互惠があつてのことであり、利益が親疎を決定する上で「新たな要素」として加わったことの実証例として

多くの研究者が見ている。

伝統的な「差序各局」は血縁、地縁関係のみならず、「婚姻関係」や擬制的血縁関係の参入を得て拡大され、同時に従来血縁の遠近によって固定的だった半径の長短を決定する重要な要素として、新たに利益が加わったと多くの研究者が解釈している。

6、郷鎮企業組織と「差序格局」

郷鎮企業のうち、郷・鎮政府が経営する集団企業は、1985年に156.9万社あったが、2000年には80.2万社に減ったのに対し、私営企業は増減を経たとは言え、2000年には200.7万社となり、個人企業は1985年の1012.2万社から2000年には1798.4万社になった。2000年には郷鎮企業で働く人は全部で9892.3万人に至った。⁽³¹⁾

従来、日本を含め、工業化は都市化を伴って進められたが、中国では「離土不離郷」の政策と二元的戸籍制度の下で農村の工業化が行われ、農村の余剰労働力は、まず郷鎮企業によって吸収された。そのため、個人企業も私営企業もいずれの郷鎮企業も設立当初より血縁関係、地縁関係といった「郷土性」の特性を持っていた。企業の雇用制度は「内外有別」であり、仕事の割り当ても親疎遠近によって振り分け、企業の管理面でもより身内のものを信頼し、家長的権威によって凝集力を図った。しかし、任用面では、単純な縁故採用ではなく、同族関係と忠誠・能力を結合させたものだった。⁽³²⁾ 同族関係は郷鎮企業の核心的部分だが、競争力の弱いものが淘汰されていく市場経済下で必要に応じた変革がなされたということになる。

同族関係の中では「差序格局」による個別的な特別扱いが原則となっているが、この原則は企業の正規の管理規則と相矛盾する。同時にこれらは、労働者と企業主の正式な関係とも衝突することになる。そのために、企業利益を守る目的で生産における重要なポストに同族メンバーを就けないとか、親

戚を雇うことを拒否したり、同族にも企業管理規則に従うことを採用の条件にするなど、同族企業の非同族化の動きが発生した。こうした一方で、企業が発展していくと、企業主と管理職員の間には企業の発展がもたらす共同の利益が生じ、管理職員の流動性が低くなる。すると、そこに一種の地縁と業縁からくる情感が生まれ、徐々に管理職員が、企業主を家長とみなし忠誠を尽くすようになる。こうして、企業主と管理職員の間には利益と情感による相互依存の擬制的同族関係が形成された。⁽³³⁾ 非同族企業の同族化現象である。その結果、「差序格局」に含まれる社会関係の範囲は更に拡大することになった。また、郷鎮企業内での矛盾や争いの処理方法も、できるだけ法律手段に訴えることを避け、話し合いで調整するという方法が取られた。⁽³⁴⁾ これは「郷土社会」の伝統的な解決方式である。

7、出稼ぎ農民と「差序格局」

改革・開放政策は、まず農村の改革から始まったが、都市でも展開されるようになると、東部沿海地区の経済発展に伴い、出稼ぎに出る農民が徐々に増え、韓長賦の『中国農民工的発展与終結』（2007）によると、1989年には約3,000万人に達した。1980年代、出稼ぎ農民の流れは「盲流」と呼ばれたが、1990年には約5,000万人、1998年には約7,000万人となり、「民工潮」（出稼ぎブーム）を迎えることになる。そして、2003年には、約1億人に達し、今日では「第三元群体」と呼ばれるに至っている。⁽³⁵⁾

李培林は1995年6月から7月まで山東省済南でアンケート調査を行い、済南市の出稼ぎ農民の親族関係ネットワークの働きは、その流動、生活、交際の全プロセスで貫かれていることを実証した。⁽³⁶⁾ 彼らが初めて都市に仕事を見つけてやってくる時、親戚、同郷人を通じて仕事を探した人が44.0%、同郷人や親戚が自分から紹介してくれたケースが31.0%となっており、合わせると75%にもなる。地元政府を通して探した人が8.1%、雇い

主がやってきて探したケースが6.7%、都市の労働市場を通して見つけた人は4.8%だった。血縁関係、地縁関係の働きが大きく、親疎の「差序」性を示している。

都市にやってきて以降、最も親密な友人は誰かという質問に、55.7%が一緒にやってきた同郷人を挙げ、21.8%が都市で知り合った農民友達を挙げ、21.5%が都市で知り合った都市の人を挙げた。

また、四川、安徽両省の4県12村で1995年春節に行われた訪問調査でも、初めて出稼ぎに出るときの情報源は親戚が42.7%、地縁関係が23.1%となっており、血縁、地縁が中心であることがわかる。⁽³⁷⁾ 下請け業者から得た情報も10.6%あるが、一般に血縁関係、地縁関係、業縁関係はある程度重なり合っていると言われる。

1つ注目すべき点は、親戚関係では父母、子供、夫婦、兄弟姉妹、妻の兄弟姉妹、姉の夫、妹の夫といった「近親」と父方、母方のおじ、おば、甥、姪、いとこといった「遠親」を比較したときに、調査した4つの県全てで「近親」より「遠親」が情報源となっていることが多いということである。謝建社と牛喜霞が江西省のある県の11村で調査した結果では、やはり最初に出稼ぎに出る際の情報は親戚からが最も多くなっていたが、こちらの調査では「近親」の比率が「遠親」より高い。⁽³⁸⁾ 村落の大きさ、閉鎖性、族や房などがどのように分散しているかなど、村をめぐる環境の違いと関わっていると考えられる。

都市に出た農民は元来の村にあるネットワークに加え、都市に出てからは共に出稼ぎに出た仲間と血縁、地縁関係によるネットワークの中で生活の基盤を持ち、更に都市での業縁関係もネットワークに取り込んでその範囲を広げている。

広東省における外来出稼ぎ農民の流動生活状況に関する実証研究でも、農民たちの流動のプロセスは、無秩序で盲目的なものでは全くなく、それ自身

の運行メカニズムと規律を持っていることが示されている。(39)

郭于華は、血縁、地縁のネットワークが流動の不確実性とその不安感を大きく低下させ、全体の流動のプロセスを後押ししていると指摘し、こうしたタイプを「関係網型流動」として概括した。(40) アンケートとインタビュー調査で、彼らが身内や親戚、友人、同郷といった人々からの情報をよりどころとする理由は、どこで、どんな企業で、どんな仕事に従事するか、収入や労働条件など具体的な情報が得られ、こうした情報が移動のリスクを大幅に軽減するからであることがわかった。(41)

また、「関係網型流動」の中で、親戚が親戚を連れ、同郷人が同郷人を連れて行く「連帯型流動」はその代表的流動の形と言える。流入地での同郷人との共同生活は異郷での生活上、心のよりどころとなっている。出稼ぎ農民が流入地でも郷土文化の特性を保持し、当地の住民と距離を置いていることは、都市の中の「安徽村」、「河南村」といった城中村の存在に代表される。

出稼ぎ農民は、自分を引き立ててくれたり仕事を手配してくれた人に報いる形で、贈り物、謝礼、リベートなどを贈っている。それに対し、また仕事が回されたり、何かあると手助けしてくれるというように交換行為が続いていく。これは、契約による関係とは言い難い。仕事を与えてくれたという恩に対し、更に重いお返しをして報いることによって、ギブ・アンド・テイクのアンバランスを作り出し、それによって更に多くの仕事を手に入れていくのだ。これは「差序格局」内の交換行為であり、「差序格局」内の付き合い方になっていると言えるだろう。

8、結論

「差序格局」を育んだ「郷土社会」は、農業による自給自足の社会で、流動性のほとんどない閉鎖的で排他的な変化に乏しい社会だった。しかし、近代化政策下の農村は、農業だけではなく郷鎮企業などで働く人も増え、郷鎮

企業で吸収されなかった余剰労働力は、都市に出稼ぎに行くなど、人口の流動性も増え、従事する産業構造も変わった。人々が必要とする資源は多様化し、資源獲得の必要性は人々の付き合う人間関係の範囲を村の外へと拡大した。

以上のような大きな変化に対応するために、人々は、従来の血縁関係、すなわち父系の親族関係と地縁関係の私人関係でできていた「圈子」に、「婚姻関係」を新たに引き入れ、業縁関係を含む擬制的血縁関係を以前と比較にならない程、広い範囲で引き入れた。結果として、「差序格局」に含まれる社会関係が大いに拡大されることになった。これは「差序格局」研究者の一致した見解である。

「差序格局」研究者のもう一つの共通した結論は、これまで、「序」を決定する要素は、儒教倫理や血縁の親疎遠近と考えられてきたが、近代化するにつれて、利益の要素が加わり、利益が決定的意味を持つようになったとするものである。利益が新たに「差序格局」の中の人間関係の親疎に影響を及ぼす重要な要素となったと多くの研究者が指摘している。しかし、本当に新たに加わったのだろうか。

費は『郷土社会』の中で「差序格局」のネットワーク内の資源の分配に関し、特に焦点を当てては言及していない。しかし、それを読み取ることができる記述は何ヶ所かある。社会変動のほとんどない血縁社会では、職業も身分も、財産も、血縁によって継承された。⁽⁴²⁾「血縁の意味は、人と人との権利と義務が親族関係により決定づけられるということだ」⁽⁴³⁾と述べている。資源の乏しい時代に、重要な資源がいかに血縁を通じて流れているかがよくわかると同時に、「同族の親族理論では、有無相通じ、互いに救済する責任を有する」⁽⁴⁴⁾のである。相互扶助は義務であり、共同生活の中で、相互扶助は頻繁で、長期的かつ多面的であるため、清算が1つ1つできない程である。資源獲得の可能性の大小が「差序格局」の範囲の伸縮自在性の所

似であり、裕福な地主や官僚階層になるとそれが小国の如く大きくなる所似なのである。(45)

費が「社会構造とは、文化と同様に人間が作り出したものであり、環境の中から満足する生活の需要を得る道具である」(46)と定義するように、その構造の中で人が生きる上で必要な資源や利益が得られるからこそ、社会構造足りうるのである。「差序格局」は事実上、伝統社会における希少資源・利益の分配モデルでもあるのである。(47)

中国の伝統的社会で血縁関係と地縁関係が重要な位置を占めたのはなぜなのか。それは、重要な資源が血縁・地縁関係、特に血縁関係を基礎に分配されたからである。財産は血縁関係で継承され、生産と消費は家族で行われ、協力も同族や地縁を基礎とする隣人との間で行われたのである。

「序」を決定する要素として利益が新たに[・][・][・]加わったもしくは重要な役割を果たすようになったのではなく、伝統的農村社会の実態は、血縁の遠近と親疎、利益が一体化しかつ正比例していたために、見えにくかったに過ぎない。

「差序格局」に内包される社会関係が拡大された意味は、資源の流れの変化に対応した「差序格局」の強い生命力を示すものと捉えるべきであり、逆に血縁・地縁といった内包する社会関係の種類は「差序格局」の核心ではなく、「己」の利益を守ることこそその核心的作用であると解釈すべきだろう。「差序格局」の内に「婚姻関係」や業縁を引き込む所以は、自己利益を守るためであり、近代化政策下の農村においても、依然として「差序格局」の内にこそ長期的安定的な人間関係と行為を律する道徳的要素と互惠に基づく交換行為があり、安心があり、信頼があるということだろう。

むしろ変わった点で注目したいのは、かつて父子を主軸とし、夫婦は従軸であったものが、「婚姻関係」が「差序格局」に参入することによって、結果として夫婦関係における女性の地位が上昇していると思われるということ

である。

また、かつて固定的だった「差序格局」内の関係的地位が固定的ではあり得ず、流動性を増し、血縁の遠近と利益と親疎が必ずしも比例的ではなくなったということである。しかし、「差序格局」それ自体は強い生命力をもっており、自らとの距離によって異なる行動様式を取る個別主義的な特別扱いの原則は、「内外有別」や郷鎮企業内の企業主と管理職員の関係でも、出稼ぎ農民の都市での実態を見ても健在であるということだ。

本論は、近代化政策下の農村における「差序格局」に関する中国国内での研究を基に、農家経営請負制、郷鎮企業の発展と農民の出稼ぎ現象との係りに絞ってマイクロに論じたが、今後の課題としては、政治権力との係りや都市での実態にも研究を広げていきたいと考えている。

注

- (1) 費孝通《乡土中国》(復刻版) 三联书店、1985年
- (2) 同上、P.78
- (3) 同上、P.10
- (4) 同上、P.10
- (5) 同上、P.55
- (6) 同上、P.58
- (7) 同上、P.55
- (8) 同上、P.39
- (9) 同上、P.27
- (10) 同上、P.29
- (11) 学習院大学東洋文化研究所出版の訳本では、「差序構造」と訳され、郭玉念、朱新建「日本華人企業文化の主な特徴について」『愛知学院大学教養部紀要』第56巻第4号では、「格差構造」と訳されている。筆者

は「差」と「序」を別々に訳す必要を感じているため、ここでは、園田茂人が『中国人の心理と行動』（日本放送協会、2002年、P.186）で示した訳を採用した。

- (12) 前掲《乡土中国》三联书店、1985年、P.40
- (13) 同上、P.31
- (14) 同上、P.37
- (15) 卜长莉：““差序格局”的理论诠释及现代内涵”、《社会学研究》、2003年第1期、P.21 – P.22
- (16) 前掲《乡土中国》三联书店、1985年、P.32
- (17) 同上、P.77
- (18) 同上、P.80
- (19) 王毅志、袁亚愚：“对建国以来我国乡村家族的探讨”、《开放时代》、2001年11月、P.110 – P.111
- (20) 王思斌：“经济体制改革对农村社会关系的影响”、《北京大学学报（哲学社会科学版）》、1987年第3期参照
- (21) 王沪宁：《当代中国村落家族文化》、上海人民出版社、1991年参照
- (22) 杨善华、侯红蕊：“血缘、婚姻、亲情于利益 — 现阶段中国农村社会中“差序格局”的“理性化”趋势”、《宁夏社会科学》、1999年第6期、P.55
- (23) 前掲“对建国以来我国乡村家族的探讨”、《开放时代》、2001年11月、P.113 – P.114
- (24) 折晓叶《村庄的再造》、中国社会科学出版社、1997年参照
- (25) 吴毅：“亲缘网络”、《开放时代》、2002年1月、P.120
- (26) 前掲“经济体制改革对农村社会关系的影响”、《北京大学学报（哲学社会科学版）》、1987年第3期、P.30
- (27) 前掲“血缘、婚姻、亲情于利益 — 现阶段中国农村社会中“差序格局”的“理性化”趋势”、《宁夏社会科学》、1999年第6期、P.55

- (28) 王思斌、卜长莉、杨善华、侯红蕊、谢建社、牛喜霞などを挙げることができる。
- (29) 前掲“ “ 差序格局 ” 的理论诠释及现代内涵 ”、《社会学研究》、2003 年第 1 期、P.27
- (30) 前掲“ 经济体制改革对农村社会关系的影响 ”、《北京大学学报（哲学社会科学版）》、1987 年第 3 期、P.32
- (31) 《中国乡镇企业统计资料》中国农业出版社、2003 年参照
- (32) 郭于华：“传统亲缘关系与当代农村的经济、社会变革”、《读书》、1996 年第 10 期、P.51
- (33) 前掲“ 血缘、婚姻、亲情于利益 — 现阶段中国农村社会中 “ 差序格局 ” 的 “ 理性化 ” 趋势 ”、《宁夏社会科学》、1999 年第 6 期、P.56
- (34) 郭于华：“农村现代化过程中的传统亲缘关系”、《社会学研究》、1994 年第 6 期、P.56
- (35) 高橋満「農民工 — 工業化と都市化の間に漂う第三元群体 —」『中国 21』2009 年 1 月、30 号、P.42 - P.43
- (36) 李培林：“流动民工的社会网络和社会地位”、《社会学研究》、1996 年第 4 期参照
- (37) 陈阿江：“从农村劳动力外流看中国农村社会结构及变迁”、《西南师范大学学报（哲学社会科学版）》、1999 年 3 月第 25 卷第 2 期、P.22
- (38) 谢建社、牛喜霞：“乡土中国社会 “ 差序格局 ” 新趋势”、《江西师范大学学报（哲学社会科学版）》、2004 年 1 月第 37 卷第 1 期、P.10
- (39) 前掲“ 传统亲缘关系与当代农村的经济、社会变革 ”、《读书》、1996 年第 10 期、P.51 - P.52
- (40) 同上、P.52
- (41) 同上、P.52
- (42) 前掲《乡土中国》三联书店、1985 年、P.76

- (43) 同上、P.76
- (44) 同上、P.81
- (45) 同上、P.28
- (46) 同上、P.85
- (47) 孙立平：“关系”、社会关系与社会结构”、《社会学研究》、1996 年第 5 期、P.22

参考文献

- [1] 費孝通《乡土中国》三联书店、1985 年.
- [2] 卜长莉：“差序格局”的理论诠释及现代内涵”、《社会学研究》、2003 年第 1 期
- [3] 马戎：“差序格局”—中国传统社会结构和中国人行为的解读”、《北京大学学报（哲学社会科学版）》、2007 年 3 月第 44 卷第 2 期
- [4] 陈俊杰、陈震：“差序格局”再思考”、《社会科学战线》、1998 年 1 期
- [5] 袁小平：“差序格局的再思考—来自山东省的调查结果”、《青年研究》、2007 年第 10 期
- [6] 杜瑛：“国内”差序格局”研究的文献综述”、《河海大学学报（哲学社会科学版）》、2006 年 3 月第 8 卷第 1 期
- [7] 杨善华、侯红蕊：“血缘、婚姻、亲情于利益—现阶段中国农村社会中“差序格局”的“理性化”趋势”、《宁夏社会科学》、1999 年第 6 期
- [8] 谢建社、牛喜霞：“乡土中国社会”差序格局”新趋势”、《江西师范大学学报（哲学社会科学版）》、2004 年 1 月第 37 卷第 1 期
- [9] 郭于华：“传统亲缘关系与当代农村的经济、社会变革”、《读书》、1996 年第 10 期
- [10] 郭于华：“农村现代化过程中的传统亲缘关系”、《社会学研究》、1994 年第 6 期

- [11] 李培林：“流动民工的社会网络和社会地位”、《社会学研究》、1996年第4期
- [12] 李培林：“中国乡村里的都市工业”、《社会学研究》、1995年第1期
- [13] 王思斌：“经济体制改革对农村社会关系的影响”、《北京大学学报(哲学社会科学版)》、1987年第3期
- [14] 王思斌：“中国人际关系初级化与社会变迁”、《管理世界》双月刊、1996年第3期
- [15] 彭庆恩：“关系资本和地位获得”、《社会学研究》、1996年第4期
- [16] 陈阿江：“从农村劳动力外流看中国农村社会结构及其变迁”、《西南师范大学学报(哲学社会科学版)》、1999年3月第25卷第2期
- [17] 王毅志、袁亚愚：“对建国以来我国乡村家族的探讨”、《开放时代》、2001年11月
- [18] 张宛丽：“非制度因素与地位获得—兼论现阶段中国社会分层结构”、《社会学研究》、1996年第1期